

解説

江原 英¹・工藤雄一郎²：寺野東遺跡から出土した木組遺構 SX-048Ei Ehara¹ and Yuichiro Kudo²: Wooden structure SX-048 excavated at the Terano-higashi site

SX-048は環状盛土遺構の南盛土ブロックと西盛土ブロックとの間の、盛土が途切れる部分のすぐ西側に位置し、谷中央の谷底部分に主として杵状の木組みが構築されている遺構である。長軸は14.5 m、短軸は約4.6 mの規模で、長方形から台形状の二つの木杵で空間を作り出している部分と、それより南側の東西両側に木材が延びている部分からなる。遺構には合計で903本の構成材と、403本の杭が使用されており、寺野東遺跡でもっとも規模の大きい木組遺構である。各辺を構成する材は、複数の材が重ねて設置され、各辺にそって主に杵の内側に密に杭が打ち込まれている。木杵の各辺を構成する材にはクリが主に用いられており、中には焦がしてあるものや、板取りしているもの、抉り込みなどの加工があるものが見られる。遺物は木杵の外側の各辺に接して、多量の土器や石器が出土している。石器は石皿や磨石類が多い。また、木杵内部からトチノキが比較的多く出土しており、この木組遺構の主な用途が堅果類の処理に関連するものであった可能性が指摘できる。木材は、分析された979点のうちクリが64%、クヌギが3%のほかは2%以下の樹種ばかりであり、クリが多用されている(江原, 1996; 栃木県文化振興事業団, 1998)。

本誌の工藤ら(2009, 植生史研究 17: 13-25)による年代学的研究によると, SX-048は縄文時代晩期前葉ごろには構築され始め, 縄文時代晩期中葉まで利用された遺構と推定されている。縄文時代晩期前葉ごろには, 環状盛土遺構の盛土の形成とともに, 環状盛土遺構の内側にあたる削平部への居住活動が活発化している。環状盛土遺構内部は, 縄文時代晩期中葉ごろまで, 主要な居住域として利用されている。SX-048の木組遺構はトチノキ種子の水さらしなど, 生業活動の場, 水辺の作業場として機能していたと推測される。

引用文献

江原 英. 1996. 栃木県寺野東遺跡谷部の遺構について. 考古学ジャーナル No. 405: 12-17.

栃木県文化振興事業団, 編. 1998. 寺野東遺跡 IV (縄文時代谷部編—1). 357 pp. 栃木県教育委員会・小山市教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団, 宇都宮.

(¹ 〒 321-8501 栃木県宇都宮市埴田 1-1-20 栃木県教育委員会
² 〒 464-8602 愛知県名古屋千種区不老町 名古屋大学年代測定総合研究センター)

(2009年3月4日受理)



図1 木組遺構 SX-048 の調査風景 (南から).

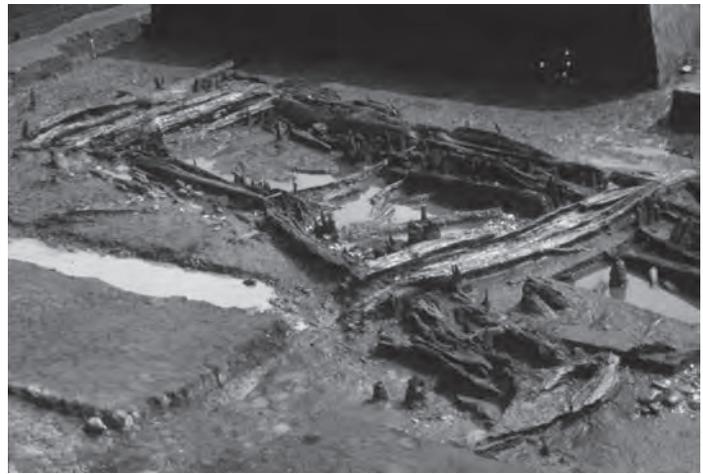


図2 木組遺構 SX-048 の検出状況 (南西から).